

## 資料

## 外国人住民における健康課題の文献レビュー

中嶋知世<sup>1§</sup>, 大木秀一<sup>1</sup>

## 概要

日本における外国人住民が抱える健康課題とその関連要因を文献（書籍 19 冊，論文 189 件）により包括的に検討した。書籍は外国人住民の実際の生活状況をより具体的に反映していると思われた。しかし，保健医療に関するカテゴリー（健康課題に関係する要因の種類）の内容は，書籍と論文とで類似した。外国人住民の健康課題に影響する要因は「言葉が通じないこと」「周囲とのつながりに乏しいこと」「労働条件が厳しいこと」の3つに大別された。ただし，外国人住民は，その国籍，在留資格，職業形態，生活環境などにより健康課題に影響する要因が異なると考えられた。

キーワード 文献レビュー（文献研究），健康課題，関連要因，外国人住民，日本

## 1. はじめに

2013年6月末の日本における外国人住民数は，204万9,123人であり，総人口の1.6%にあたる<sup>1)</sup>。外国人住民数は，リーマンショックと東日本大震災の影響で2009年以降減少していたが，2013年には再び増加している<sup>1)</sup>。外国人受け入れに関する問題は様々にあり，外国人住民が集住する大都市や製造業などが盛んな地域で先進的取り組みが行われている<sup>2)</sup>。しかし，日本の人口減少とグローバル化による人の国際移動が進むこと等から，外国人住民に関わる課題は近い将来に全国の地方自治体に広がることが予想されている<sup>2)</sup>。総務省は，外国人住民に関わる課題のなかでも医療の問題は深刻として，主に医療保険と医療通訳に関して言及し，保健の面でも同様の課題があるとしている<sup>2)</sup>。外国人住民の健康課題とその関連要因を検討するにあたり国内の研究を概観すると，いずれかの領域に限定した文献検討はいくつかある<sup>3-7)</sup>。しかし，これまでに蓄積された調査研究結果から外国人住民の健康課題とその関連要因を包括的に検討したものは見当たらなかった。

外国人住民に対する調査は，一般住民に対する通常の調査とは異なり，調査対象や調査方法の選定などで様々な困難を伴うことが予想される。したがって，学術的とされる研究においても調査結果には様々な限界があると思われる。しかし，そのような状況においても既存の研究成果をまとめておくことは，今後の研究の方向性を知る上で意義があると考えられる。本研究の目的は外国人住民の

抱える健康課題とその関連要因を文献により包括的に検討し，これまでに得られている知見を整理し，今後の研究課題を明らかにすることである。

## 2. 方法

## 2.1 用語の定義

## (1) 「外国人住民」

日本で暮らす外国人の総称は，在日外国人，滞日外国人，在留外国人など様々である<sup>15)</sup>。日本に住んでいることを重視するために，総務省の「多文化共生の推進に関する研究会」における「外国人住民」という総称を用いた。その定義は，住民基本台帳法（1967）に定められている「日本の国籍を有しない中长期在留者で市町村の区域内に住所を有するもの」である。

## (2) 「健康課題」

健康課題という単語の定義は見当たらなかった。

世界保健機関（WHO）は，健康を「Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」と定義している<sup>8)</sup>。保健医療の観点から健康に影響を与える要因を検討対象とするため，健康課題を「個人もしくは集団の身体，精神，社会的健康の一つ以上に対して解決しなければならない問題」と定義した。

## 2.2 文献レビューのプロセス

外国人住民が抱える健康課題とその関連要因を

<sup>1</sup> 石川県立看護大学 <sup>§</sup> 責任著者

包括的に検討するために、対象文献は書籍と論文の両方とした。

書籍の検索には、インターネット書籍検索サイト Amazon (<http://www.amazon.co.jp/>) を用いて、2013年3月末までキーワード検索を行った。タイトルに「外国人」「日本」「支援」を含む書籍を検索し、該当した74冊のうち、入手不可能な書籍4冊は対象書籍から除いた。外国人住民の課題に言及していない語学検定の参考書および小説51冊も除外した。最終的に、19冊<sup>9,27)</sup>の書籍を検討対象とした。

検討対象となった書籍19冊を、日本十進分類法(NDC)9版の3次区分表<sup>28)</sup>を参考に分類し、傾向を調べた。その後、この19冊を繰り返し読み、外国人住民が抱える健康課題に関係する個々の要因をコードとして取り出した。そして、類似するコードをグループにまとめあげ、一つの小カテゴリー(健康課題に関係する要因の種類)とした。この作業を繰り返すことで、健康課題に関する小カテゴリーを複数抽出していった。抽出した複数の小カテゴリーから、類似する小カテゴリーを更にグループにまとめあげ、大カテゴリー(健康課題に関係する要因の種類の大きな区分)とした。

論文の検索には、医学文献情報データベースの医中誌Web(Ver.5)を用いた(検索日時2013年10月8日)。外国人住民の保健医療福祉に関する論文には、原著論文以外の数多くの事例や実践活動の報告などがある。これらを除外すると本研究の目的を達成できないと考え、会議録以外の論文は全て検討対象とした。論文言語および出版年を制限せず、「会議録除く」のみを条件としたキーワード検索を行った。検索式は「外国人 and (在日 or 滞在) and 健康」とした。該当した162件のうち、外国人住民の課題に言及していない症例報告3件を除いた159件に、それらの引用文献をもとにさらに30件を加えた189件を検討対象とした。

検討対象となった論文189件の年次推移と研究領域の傾向、研究領域別の研究内容の動向を調べた。その後、この189件から、論文の種類に関わらず、「引用文献の偏り・乏しさが著しくないこと」「サンプリング方法の妥当性」「具体的事実の記載があること」を条件としてさらに絞り込み、論文相互の比較と対比およびカテゴリー抽出の検討対象とした。ただし、外国人住民を対象とする調査はサンプリングによる偏りが生じやすいため、研究の限界にこの点を記載してある論文は除

外しなかった。最終的に74件<sup>29-102)</sup>を論文相互の比較と対比およびカテゴリー抽出の検討対象とした。この74件の論文の中の背景、目的、研究対象、研究方法、結果、考察の内容をそれぞれ要約し、Microsoft Excel 2010を用いて要約表を作成した。この要約表をもとに論文相互の比較と対比を行い、類似点と相違点を調べた。カテゴリー抽出のために、この74件の論文の中の結果と考察を繰り返し読み、書籍の場合と同様に外国人住民の抱える健康課題に関係する個々の要因をコードとして取り出した。そして、研究領域別に類似するコードをグループにまとめあげ、一つのカテゴリーとした。この作業を繰り返すことで、健康課題に関するカテゴリーを複数抽出していった。

最後に、文献(書籍と論文)から得られたあらゆる情報を加味しながら、すべての研究領域のカテゴリーを論理的に配列し、ストーリーを作成した。

### 3. 結果

#### 3.1 書籍の分析：分類

検討対象となった書籍19冊の分類は、社会科学17冊<sup>9,25)</sup>と歴史2冊<sup>26,27)</sup>であった。社会科学17冊の内訳は、社会福祉6冊<sup>9-14)</sup>、社会病理4冊<sup>15-18)</sup>、生活・消費者問題<sup>19)</sup>・労働問題<sup>20)</sup>・社会教育<sup>21)</sup>・労働経済<sup>22)</sup>・法律<sup>23)</sup>・民族史<sup>24)</sup>・社会学<sup>25)</sup>各1冊であった。

#### 3.2 書籍の分析：内容から抽出されたカテゴリー

書籍の内容から抽出された小カテゴリーと大カテゴリーを表1に示す。

以下に、保健医療に関わる要因の詳細を示す。

##### (1) 宗教と文化

日本において少数民族民族が自国での生活様式つまり「あたりまえ」を実践することに起因していた<sup>16)</sup>。フィリピン人の週末の礼拝の継続<sup>10)</sup>、イスラム教徒の礼拝やハラールの継続<sup>16)</sup>などが例としてあげられていた。

##### (2) 地域でのつながりと情報収集

外国人住民が自国民同士で集住する場合、同地区の日本人コミュニティとの友好的関係の構築や情報の共有に支障をきたすことがあった<sup>16,18)</sup>。例として、ゴミの捨て方<sup>10)</sup>、災害時の対応<sup>11)</sup>、市区町村役所の窓口の利用<sup>16)</sup>、地域行事への参加<sup>18)</sup>があげられていた。

表1 書籍の内容から抽出されたカテゴリー

大カテゴリー	小カテゴリー
社会的要因	国際結婚と子どもの国籍 <sup>9,19,23,24)</sup>
	難民や高齢化といった受け入れ側に起因しない問題 <sup>9,17)</sup>
	法的制度および偏見からの差別的扱い <sup>25,26)</sup>
	災害時の対応 <sup>11,13)</sup>
経済的要因	医療保険への加入の有無 <sup>14,22,27)</sup>
	研修・技能実習生の不正利用 <sup>10,16)</sup>
	女性労働者の人身売買 <sup>11)</sup>
	就労差別と劣悪な労働条件による生活基盤の不安定さ <sup>15,20)</sup>
	不況 <sup>14,16)</sup>
教育的要因	就学機会の不平等と学歴格差 <sup>20,21)</sup>
	母国語能力も日本語能力も勉学に不十分 <sup>10,17)</sup>
保健医療に関わる要因	宗教と文化 <sup>10,11,16)</sup>
	地域でのつながりと情報収集 <sup>10,11,16,18)</sup>
	日本語の習得と親子の共通言語 <sup>9)</sup>
	ドメスティックバイオレンスと児童虐待 <sup>9,10,12)</sup>
	メンタルヘルス <sup>9,14)</sup>
	労働衛生 <sup>9,14)</sup>
	受診とその継続の困難 <sup>9,12,14,22)</sup>

## (3) 日本語の習得と親子の共通言語

外国人住民とその子どもとは、日本語の習得速度に差があるため、親子間の意思疎通の困難や価値観の違いが発生し葛藤が起きていた<sup>9)</sup>。

## (4) ドメスティックバイオレンス（以下DVとする）と児童虐待

在留資格が「日本人の配偶者」である女性へのDVは、通常の暴力に加え、在留資格を脅かされるなど、その不安定な法的地位を利用した特有の暴力が加わっていた<sup>9)</sup>。彼女らは在留資格のためにDVを我慢し、離婚に至らないとされる<sup>10)</sup>。そして、彼女らの連れ子に対する性的虐待も起きていた<sup>12)</sup>。さらに、ストレスフルな環境から、彼女たち自身がわが子に暴力を振るう例もあった<sup>10)</sup>。故意の虐待に加え、義務教育中の労働など、文化的理解の違いから日本では虐待と捉えられる行為もあった<sup>9)</sup>。

## (5) メンタルヘルス

難民や戦争体験<sup>14)</sup>、年齢による適応の差、望まない移住、家族からの別離、移住に伴う地位の低下、言葉が通じないことなどが影響する<sup>9)</sup>とされていた。うつ病、統合失調症、アルコール依存症、心理的外傷後ストレス障害などの罹患に発展することがあるとされていた<sup>9)</sup>。しかし、文化

的理解の違いから、本人や家族が病と判断しない、そもそも「抑うつ状態」などといった言葉がない民族もあった<sup>9)</sup>。

## (6) 労働衛生

外国人労働者の労働災害は、社会的制度や法的地位との密接な関連性があった<sup>9,14)</sup>。また、上司が外国人労働者に労災を適応しなかったケースも報告されており<sup>14)</sup>、差別的な側面もあった。

## (7) 受診とその継続の困難

医療費未払いを懸念し、予め確認した支払い可能額に応じた治療のみ行う医療機関<sup>12)</sup>や、外国人患者の受診を回避したがる医療機関<sup>9)</sup>があった。医療費の支払いと医療保険加入との関係が多く記載されていた。あえて、金銭的な理由から健康保険への未加入を選択する出稼ぎ労働者もいた<sup>22)</sup>。他に、医療通訳の圧倒的不足が指摘されていた<sup>14)</sup>。医療職者との情報のやりとりが正確に行えず、治療選択や文化に配慮した治療・ケアを妨げていた<sup>9)</sup>。

## 3.3 論文の分析：論文数の年次推移と研究領域の傾向

検討対象となった189件について、論文数の年

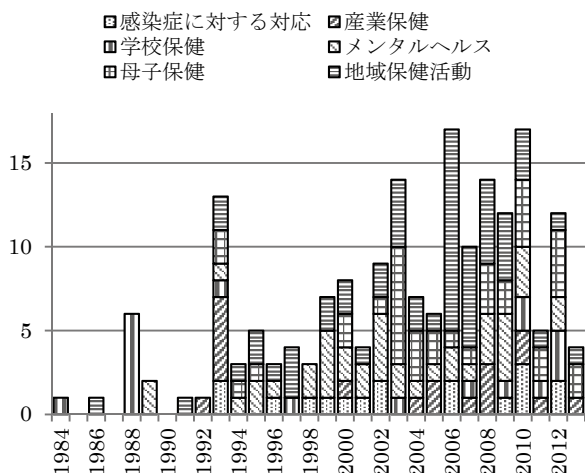


図1 外国人住民の保健医療福祉に関する論文数の年次推移 n=189

次推移を図1に示す。先行研究<sup>7)</sup>を参考に6つの研究領域に分けたところ、各分野全体にわたる地域保健活動58件、母子保健38件、メンタルヘルス40件、学校保健18件、産業保健18件、感染症に対する対応17件であった。

### 3.4 論文の分析：研究領域別の研究内容の動向

#### (1) 地域保健活動

1998年、大森ら<sup>47)</sup>により、主に長野県で活動するNGO（非政府組織：Non-Governmental Organization）の無料医療相談の実績から、外国人住民には肥満や高血圧などが多く見受けられること、国籍に関わらず食事に関する相談が最も多いことが報告された。その後、2003年頃～2010年頃に外国人住民の国籍ごとの生活実態調査、主に食習慣についての調査が行われた。最近では、呉ら<sup>29)</sup>により、蓄積されたNGOの活動記録から国籍ごとの特徴が着目されていた。さらに、橋本ら<sup>30)</sup>は、自治体に外国人住民への保健活動を実態調査し、外国人住民の実態調査結果も踏まえたうえで、必要な保健活動について具体的に提言した。

#### (2) 母子保健

1990年代までは実践活動の報告が多くを占めるが、外国人母子の実態調査も行われていた。2003年に、橋爪ら<sup>103)</sup>により、外国人女性の精神疾患発症と周産期・育児期の異文化間葛藤によるストレスとの関係性について事例検討が発表された。その後、外国人母親の周産期と育児における文化間葛藤に着目した質的・量的な実態調査が増加していた。最近では、植村ら<sup>51)</sup>により、属性

の似通った対象による、外国人母親の実態とニーズの把握が行われていた。

#### (3) メンタルヘルス

1990年代後半までは特集が多くを占めていた。1999年に、平野<sup>84)</sup>による在日フィリピン人出稼ぎ労働者への調査より、精神的健康と私的支援ネットワークの関係性が指摘された。さらに2009年、文ら<sup>73)</sup>による在日コリアン高齢者の実態調査と鶴川ら<sup>70)</sup>による難民への実態調査より、福祉サービスに着目したメンタルヘルスサポートの必要性が言及されるようになった。

#### (4) 学校保健

今回入手した論文のうち、最も古いものが学校保健であった。留学生についての論文のほとんどは、中国人留学生の精神的健康度の調査であった。外国籍の児童に関して、佐藤ら<sup>90)</sup>によれば、外国人学校には学校保健安全法上の定期健康診断が適用されない場合があり、外国人学校での歯科検診や健康診断の開催を通じた実態調査がなされていた。また宮原ら<sup>88)</sup>は、わが子との使用言語の違いから、性教育に悩む外国人母親の存在を報告していた。

#### (5) 産業保健

今回入手した論文のうち、外国人労働者の労働実態および労働衛生を調査・報告した論文は見当たらなかった。しかし、地域保健活動、精神保健として分類した論文に外国人労働者を対象とした調査があり、勤務形態・人間関係によるストレスが取り上げられていた<sup>39,43)</sup>。

#### (6) 感染症に対する対応

結核・HIV/AIDS（ヒト免疫不全ウイルスおよび後天性免疫不全症候群：Human Immunodeficiency Virus/Acquired Immunodeficiency Syndrome）の調査が継続して行われていた<sup>98-102)</sup>。

### 3.5 論文の分析：カテゴリ抽出の検討対象となった論文の種類

外国人住民の健康課題に関する論文全189件のうち、カテゴリ抽出の検討対象となった論文は74件であり、その内訳は、地域保健活動58件中22件<sup>29,50)</sup>、母子保健38件中17件<sup>51-67)</sup>、メンタルヘルス40件中19件<sup>68-86)</sup>、学校保健18件中7件<sup>87-93)</sup>、産業保健18件中1件<sup>94)</sup>、感染症に対す

る対応 17 件中 8 件<sup>95-102)</sup>であった。産業保健は 18 件 (原著論文 1 件, 特集 12 件, 座談会 1 件, 解説 4 件) のうち絞込みの条件に該当した論文が 1 件のみであった。

74 件の研究対象は, 外国人住民 45 件<sup>31,33,35,37-39,43,44,46,48,49,51-53,55,58,60,66,68-78,80-94,102)</sup>, 保健師 3 件<sup>30,54,57)</sup>, 診療記録 8 件<sup>36,45,95-98,100,101)</sup>, 活動報告 10 件<sup>29,34,40,41,47,62-65,67)</sup> など多岐にわたった。外国人住民を対象とした調査研究における対象国籍・地域の内訳は, ブラジル 14 件<sup>31,37,39,43,51,69,76,80,82,83,86-88,90)</sup>, 中国 5 件<sup>52,53,77,89,92)</sup>, 韓国・朝鮮 5 件<sup>68,72-74,102)</sup>, フィリピン 4 件<sup>48,58,84,94)</sup>, カンボジア 3 件<sup>35,38,71)</sup>, ベトナム 1 件<sup>70)</sup>, クルド 1 件<sup>75)</sup>, 国籍・地域に制限のないもの 12 件<sup>33,44,46,49,55,60,66,78,81,85,91,93)</sup> であった。国籍・地域に制限のないものは, 在留資格別や性別ごとの調査研究などであった。

### 3.6 論文の分析: 論文相互の類似点と相違点

要約表をもとに論文相互の比較と対比を行った (要約表は紙面の都合で掲載していない)。結果は以下の通りである。

#### (1) 保健医療の利用やアクセス

大森ら<sup>47)</sup>による無料医療相談会での調査において, 超過滞在と医療保険への未加入が受診行動に影響するとされ, 通報への恐れと経済的問題が受診困難につながっていた。しかし, 平野<sup>94)</sup>による教会利用者の調査において, 受診行動に影響するのは情緒的社会的ネットワークだとしていた。このように, 外国人住民が受診困難となる要因は調査により異なる結果が得られていた。このことから, 外国人住民の受診困難に対して, 医療保険への加入増加はもちろんのこと, 医療関連情報の格差是正が必要であることがわかった。他に, 外国人母親に関して, 市町村窓口での意思疎通困難や, 交通手段がないことによる各事業への自力での参加不可能がとりあげられていた<sup>54,57)</sup>。外国人住民の理解内容の確認や, ニーズの把握不足<sup>99)</sup>への対処が必要とされていた。

#### (2) 外国人母親と周囲とのつながり

植村ら<sup>51)</sup>は, 外国人母親は身内とのつながりが強く, 友人や近所との日常的な付き合いはあまりないとした。そして, 川崎ら<sup>52)</sup>は, 地域における中国人母親の孤立を述べていた。さらに磯野ら<sup>60)</sup>は, 外国人母親は予防接種の情報収集として, 口コミはほとんどないとした。しかし, 橋本ら<sup>55)</sup>は, 外国人母親は周産期・育児期において,

友人や近所の人へ助けを求めていると述べていた。加えて鶴岡ら<sup>58)</sup>は, 外国人母親における妊娠・出産・育児に伴う二国間文化のジレンマへの対処法として, 日本人の知人への相談があったと述べていた。このように, 外国人母親と周囲とのつながりに関して, 調査により結果の違いがあった。このことから, 外国人母親は地域で孤立しやすい傾向がある一方, 得たい情報や支援に合わせて手段を選択できているとも考えられた。地域における外国人母親と日本人母親との交流を必要視する報告<sup>63)</sup>もあり, 医療従事者による地域の連携促進は不可欠<sup>58)</sup>とされていた。

#### (3) ブラジル人労働者の食生活

長沼ら<sup>43)</sup>は, ファストフードやコンビニエンスストアの利用, 長時間労働により食生活が不規則だとしていた。しかし, 芝崎ら<sup>39)</sup>は, インスタント食品はほとんど食べず, 食生活は規則的だとしていた。このように, ブラジル人労働者の食生活に関して, 結果の相違がみられた。この 2 件の研究対象は背景が異なっていた。長沼ら<sup>43)</sup>の対象は日系人, かつ, 雇用条件に時間外労働がある労働者であった。芝崎ら<sup>39)</sup>の対象は日系でないブラジル人がおり, 主婦も含まれていた。ブラジル人労働者の食生活について, 個別背景・勤務形態・家族構成を合わせて検討することが実態把握につながっていた。

#### (4) 外国人住民のメンタルヘルス

出稼ぎ労働者である日系ブラジル人と, それに付随して来日した家族のメンタルヘルスに影響するものは, 自ら望んで来日したのか, 家族等に付随しての望まない来日なのか, 労働条件と労働環境, 来日前後の社会的地位の変化, 帰国の目処, 若年層の自我同一性とされていた<sup>69,76,80,82,83)</sup>。平野<sup>84)</sup>は, 多くが母国に家族を残して来日するアジア出身の出稼ぎ労働者に着目し, フィリピン人出稼ぎ労働者のメンタルヘルスに母国および日本の配偶者家族との関係とサポート, 仕送りに伴う経済的問題が影響するとしていた。家族単位で移住する日系ブラジル人の出稼ぎ労働者と, 家族を母国に残し来日するアジア出身者のどちらも, メンタルヘルスに関係する要因に家族の影響があった。もともと難民として来日した後に定住化したカンボジア人やベトナム人においても, 精神疾患は家族の問題であり, 対処行動は家族での話し合いや, 家族と向き合うこととされていた<sup>70,71)</sup>。し

かし、文ら<sup>74)</sup>によれば、高齢化が進む在日コリアン一世は、福祉制度の受給の程度、日常生活動作・生活の質の低下の程度、社会とのつながり、生きがいの有無がメンタルヘルスに影響するとされていた。このように、外国人住民は背景が異なる者の集団であり、メンタルヘルスに関係する要因には類似する点も相違する点も混在していた。

### (5) 感染症に対する対応

感染症に対する対応のなかで、結核と HIV/AIDS の治療における治療継続の困難が共通して見出された<sup>97-100)</sup>。その要因に外国人住民の超過滞在、帰国、経済的困難さ、日本人の医療従事者との関係性があげられていた<sup>101,102)</sup>。

## 3.7 論文の分析：研究領域別に抽出されたカテゴリ

研究領域別のカテゴリを表2に示す。ただし、

産業保健は検討対象が1件のみであったため、対象から除外した。研究領域別のカテゴリは各6～8個となった。

## 3.8 文献（書籍と論文）から得られたストーリー

文献（書籍と論文）から得られたあらゆる情報を加味して得られたストーリーは以下の通りである。

外国人住民は、「教育・社会制度の恩恵を受けにくく」市民権も獲得できていない。「厳しい労働条件・労働環境と不安定な生活基盤」であり、「生活習慣を整えにくい」。一部は「HIV/AIDS と結核のハイリスクグループ」でもあり、「身体的健康を維持しにくい」状況にある。「保健医療に関する知識に関心」はあるものの、「日本語の学習機会に乏しく」「言葉が通じない」ため、情報格差が起きている。「保健医療職者との意思疎通困

表2 論文の研究領域と抽出されたカテゴリ

研究領域	カテゴリ
地域保健活動	厳しい労働条件 34,41,46)
	生活習慣を整えにくい環境 29,36,37,39,43,47,49)
	身体に異変を感じても受診が困難 33,45,48)
	感染症のリスクが高いこと 32,50)
	精神的社会的つながりの確保 42,48)
	妊娠・出産・子育てにおける文化的葛藤 30,38,44)
	医療通訳の不足 31,35,40,50)
母子保健	医療情報の多言語化が十分でないこと 31,35,40,49,50)
	身内以外とのつながり不足による孤立・情報格差 51,55,58,59,63,66)
	厳しい労働条件の心身への負担 51,59,62,63,66)
	経済面精神面への身内の強い影響力 51,58,59,63,66)
	母子保健システムを利用しにくいこと 54,55,57,60)
	文化・習慣への戸惑い 52,55,58,67)
メンタルヘルス	保健医療職者との意思疎通が困難 53,55,56,61,64,65)
	厳しい労働条件による不安定な生活基盤 69,75,79)
	異文化への適応を余儀なくされる 76,78,82,83)
	日本語の学習機会の不足による上達の遅延 70,85,86)
	教育・社会制度の恩恵を受けにくいこと 70,75,79)
	身体的健康の低下 77,80)
	社会・家族とのつながりとサポート 68,70-74,81,84)
将来の見通しが立たないこと 80,82)	
学校保健	情報格差による保健サービスへの到達困難 88,89,91,92)
	小児肥満・やせ 87,90,93)
	う歯 87,90,93)
	異文化への精神的ストレス 89,92)
	勉強と進学への不安 89,92)
	家族・友人との情緒的つながり 88,89,92)
感染症に対する対応	HIV/AIDS と結核のリスクが高いこと 95-102)
	アジア出身のニューカマー 95-102)
	超過滞在 95-102)
	受診の遅れ 95-102)
	保健医療に関する知識の収集困難 95-102)
	治療の継続困難 95-102)
	医療職者との意思疎通困難 95-102)
医療費の支払い困難 95-102)	

難」「医療費の支払い困難」「超過滞在」など様々な要因から「受診の遅れ」「治療の継続困難」につながりやすい。「異国のシステムへの適応を余儀なく」されており、特に「母子保健医療システムへのニーズが満たされにくい」状況にある。加えて外国人児童は社会制度と親の日本語能力から「保健サービスの恩恵を受けにくく」、「小児肥満・やせ、う歯」がみられている。外国人住民は在留資格に関わらず「異文化適応」へのストレスを感じており、特に「妊娠・出産・子育てにおける文化的葛藤」が目立つ。そして、外国人住民のメンタルヘルスには「社会・家族とのつながりとサポートの有無」が影響している。

#### 4. 考察

##### 4.1 本研究の強みと限界

本研究の強みは、書籍と論文を合わせて検討することで、外国人住民の健康課題とその関連要因を包括的に検討したことである。検討の結果、外国人住民の抱える健康課題とその関連要因は生活全般に渡り、かつ、その要因同士が密接に関連し合っていることが明らかとなった。本研究の限界は、使用したデータベースが1種類であったために、これに搭載されていない論文を見落としている点である。さらに、検索に用いたキーワードの妥当性にも限界があった。会議録を検討対象から除いているので、最新の健康課題や逸話的なテーマを見落としている可能性もある。以上を踏まえて考察する。

##### 4.2 外国人住民の人口動態と論文の年次推移

図1より、外国人住民の保健医療福祉に関する論文数は1980年代後半以降、増減を繰り返しながら2010年まで増加傾向にあった。日本では1980年代後半以降に、東南アジア、南米出身の外国人人口が急増した<sup>5)</sup>。外国人住民の健康課題に関する論文数の増加はその人口動態と一致する。

総務省が2006年に発表した「地域における多文化共生推進プラン」では保健医療福祉の具体的な施策として、保健医療における多言語対応、医療通訳システムの構築、健康診断や健康相談の実施、母子保健および保育、高齢者・障害者への対応を示している。年次推移を調べるために検討した189件の研究領域の内訳のうち、7割が地域保健活動、母子保健、メンタルヘルスであった。この3つの研究領域の内容は、自治体の保健活動、

医療通訳、健康診断、健康相談、生活習慣の実態、精神障害の発生、在日コリアン高齢者の調査である。外国人住民の健康課題の増加やニーズの高まりが、研究の動向に反映されていると考えられた。

##### 4.3 書籍と論文との内容の相違

論文は、外国人住民の保健医療福祉に関する調査研究を通じて、外国人住民の健康課題に係る要因の一つとして、市民権や教育といった日本の制度へ言及していた。しかし、書籍は法律や制度に加えて、日本人の差別的意識にも言及していた。特に、外国人住民に起因しないもの、すなわち、就労差別や偏見といった日本社会における外国人住民の受け入れ方への言及が多かった。今後、外国人住民が抱える健康課題の研究において、差別的意識へのアプローチ、マイノリティへの配慮、という視点が必要になると思われる。

##### 4.4 外国人住民の健康に影響を与えるもの

外国人住民の抱える健康課題の関係を整理し図2に示す。日本の制度がすべての健康課題に影響するという前提のうえで、外国人住民が抱える健康課題に影響を与える要因は大きく「労働条件」「言葉」「つながり」の3つに大別された。そして、その影響を強く受けるのは「母子の健康」「メンタルヘルス」「受診」「感染症に対する対応」となった。

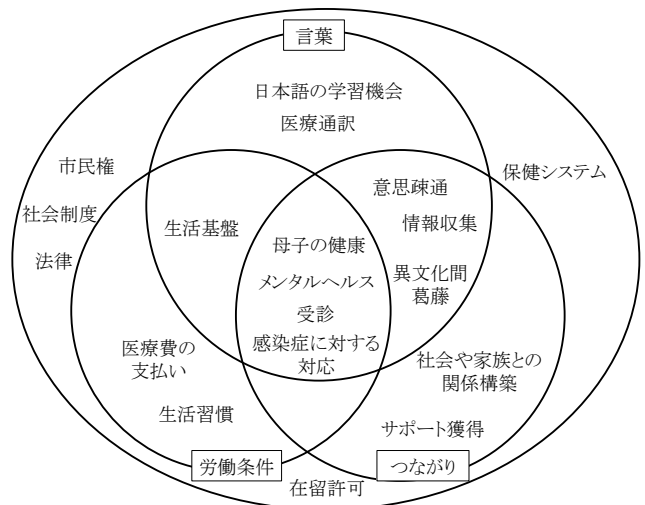


図2 外国人住民の抱える健康課題の関係



#### 4.5 外国人住民の多様性

研究領域別にみた研究内容の動向から、国籍、在留資格、職業形態、生活環境など個別背景に着目した研究が求められてきていると考えられた。加えて、これまでの研究結果の比較と対比より、外国人住民の健康課題とその関連要因は彼らの個別背景により異なると考えられた。総務省の「地域における多文化共生推進プラン」では、地域における多文化共生施策の指針等において、地域の特性、住民の理解、外国人住民の実情・ニーズなどを踏まえ、地域に必要な多文化共生施策の基本的な考え方を明確に示すこととされている。外国人住民を一概に日本人以外と捉えずに、個別性に着目することが、外国人住民の健康ニーズに沿ったアプローチには必要だと考えられた。

#### 5. 結論

日本における外国人住民の健康課題に影響する要因は、以下のように整理された。

1. 言葉が通じないこと
2. 周囲とのつながりに乏しいこと
3. 労働条件が厳しいこと

ただし、外国人住民はその国籍、在留資格、職業形態、生活環境などにより健康課題に影響する要因が異なると考えられた。

#### 謝辞

本研究は、平成25年度石川県立看護大学学内研究助成を受けて実施したものである。

#### 利益相反

なし

#### 文献

- 1) 法務省：平成25年6月末現在における在留外国人数について、URL: [http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04\\_00037.html](http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00037.html) (アクセス日2014年9月13日)
- 2) 総務省：2006年3月多文化共生の推進に関する研究会報告書～地域における多文化共生の推進に向けて～、[http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota\\_b5.pdf](http://www.soumu.go.jp/kokusai/pdf/sonota_b5.pdf) (アクセス日2014年9月13日)
- 3) 李錦純, 李節子, 中村安秀：在日コリアンの人口高齢化と死亡の動向－死亡・死因統計に関する日本人との比較分析－, 厚生の指標, 59 (2), 27-29, 2012.
- 4) 李節子：在日外国人の健康問題からみる国際保健, 保健の科学, 47 (10), 723-727, 2005.

- 5) 李節子：在日外国人の保健医療, 国際保健医療, 18 (1), 7-11, 2004.
- 6) 平野裕子：在日外国人の身体的・精神的健康－保健学・看護学的視点から－, 福岡医学雑誌, 94 (8), 241-249, 2003.
- 7) 歌川孝子, 丹野かほる：在日外国人の異文化ストレスに関する研究の動向－異文化ストレスの実態と地域保健活動の課題－, 新潟大学医学部保健学科紀要, 9 (1), 131-137, 2008.
- 8) 公益社団法人日本WHO教会：健康の定義について, <http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html> (アクセス日2013年8月13日)
- 9) 社団法人日本社会福祉士会：滞日外国人支援の実践事例から学ぶ多文化ソーシャルワーク, 中央法規, 1-205, 2012.
- 10) 房総日本語ボランティアネットワーク (編)：千葉における多文化共生のまちづくり広がるネットワークと子どもたちへのまちづくり, エイデル研究所, 1-285, 2012.
- 11) 移住労働者と連帯する全国ネットワーク (編)：多民族・多文化社会のこれから NGO からの政策提言, 移住労働者と連帯する全国ネットワーク, 1-206, 2009.
- 12) 長澤成次：多文化・多民族共生のまちづくり広がるネットワークと日本語学習支援, エイデル研究所, 1-189, 2000.
- 13) 社会福祉法人大阪ボランティア協会 (編)：テキスト市民活動論～ボランティア・NPOの実践から学ぶ～, 社会福祉法人大阪ボランティア協会, 1-191, 2001.
- 14) 石河久美子：多文化ソーシャルワークの理論と実践外国人支援者に求められるスキルと役割, 明石書籍, 1-172, 2012.
- 15) 辻村みよ子, 大沢真理 (編)：ジェンダー平等と多文化共生－複合差別を超えて－, 東北大学出版会, 1-263, 2010.
- 16) 移住労働者と連帯する全国ネットワーク (編)：移住者が暮らしやすい社会に変えていく30の方法, 合同出版, 1-143, 2012.
- 17) 「外国につながる子どもたちの物語」編集委員会：まんがクラスメイトは外国人－多文化共生20の物語－, 明石書店, 1-171, 2009.
- 18) 加藤剛 (編)：もっと知ろう！わたしたちの隣人ニューカマー外国人と日本社会, 世界思想社, 1-280, 2010.
- 19) 千葉明：日本人は誰も気付いていない在留中国人の実態, 彩図社, 1-142, 2010.
- 20) 鈴木江理子：日本で働く非正規滞在者, 明石書店, 1-520, 2009.



- 21) 日比谷潤子, 平高史也: 多言語社会と外国人の学習支援, 慶應義塾大学出版会, 1-212, 2005.
- 22) 佐野誠, 秋山周二, 西澤毅, 他1名: 必要な知識と手続きがすべてわかる! 外国人雇用マニュアル, 総合出版すばる舎, 1-416, 2010.
- 23) 大串博行: 日本社会の外国人人類の「旅」と入国管理制度, パレード, 1-118, 2011.
- 24) 小田一彦: 日本に在留する中国人の歴史の変容, 風詠社, 1-87, 2010.
- 25) 岩永真治: グローバリゼーション、市民権、都市ヘクシスの社会学, 春風社, 1-358, 2008.
- 26) Castles, S., Miller, M.J. (著) / 関根政美, 関根薫 (訳): 国際移民の時代第4版, 名古屋大学出版会, 1-486, 2011.
- 27) ステファニ・レナト: 日本は変か不思議か国際化日本, 柘植書房, 1-204, 1995.
- 28) もりきよし, 日本図書館協会分類委員会 (編): 日本十進分類法新訂9版, 日本図書館協会, 1-418, 1995.
- 29) 呉小玉, 那須順子, 李錦純, 他6名: 「国際まちの保健室」の開設と運営による在日外国人の健康支援活動の報告, 兵庫県立大学地域ケア開発研究所研究活動報告集, 7, 27-29, 2013.
- 30) 橋本秀実, 深堀浩樹, 伊藤薫, 他4名: 三重県保健師の在日外国人への保健活動, 三重県立看護大学紀要, 14, 19-26, 2010.
- 31) 永田文子, 濱井妙子, 菅田勝也: 在日ブラジル人が医療サービスを利用する時のにわか通訳者に関する課題, 国際保健医療, 25 (3), 161-169, 2010.
- 32) 沢田貴志, 中村安秀: 在日外国人に対する医療, 日本医事新報, 4458, 34-41, 2009.
- 33) マルティネス真喜子, 松尾隆司, 川井八重, 他1名: 滋賀県在住の南米出身外国籍住民の医療保険と医療対処行動-滋賀県の在日外国籍住民の持つ医療へのニーズ実態調査より-, 6 (1), 54-58, 2008.
- 34) 中村裕: 在住外国人の健康と地域社会, 23 (1), 9-12, 2008.
- 35) 糸井祐子: 在日カンボディア人の健康観と医療施設利用時にもつ感情の特徴, 10 (1), 55-64, 2008.
- 36) 畔柳良江, 水口雅子, 芝崎亜希子, 他3名: 長野県における外国人健診受診者の健康状態と今後のあり方-NGO主催による外国人健診の結果分析より-, 長野県看護大学紀要, 10, 101-112, 2008.
- 37) 浅山真悠子, 鈴木ひとみ, 辻岡芳美, 他2名: 滋賀県下の医療機関を受診した日ブラジル人の受療行動と生活習慣, 公立甲賀病院紀要, 10, 19-26, 2007.
- 38) 糸井裕子: 在日カンボディア人の伝統的な健康実践と援助関係へのニーズ, 日本看護医療学会雑誌, 9 (1), 8-17, 2007.
- 39) 芝崎亜希子, 水口雅子, 多賀谷昭: 長野県上伊那地域に暮らすブラジル人の食事を中心とした生活習慣, 長野県看護大学紀要, 9, 75-85, 2007.
- 40) 中川久美子, 石河真人: 国際化時代の保健活動を考える在日外国人への保健活動①三重県鈴鹿保健福祉事務所における外国人保健サービス向上への取り組み, 保健師ジャーナル, 62 (12), 1016-1021, 2006.
- 41) 濱井妙子: 国際化時代の保健活動を考える在日外国人への保健活動②静岡県袋井市における調査から見えてきた在日ブラジル人の健康問題とその支援, 保健師ジャーナル, 62 (12), 1022-1028, 2006.
- 42) 保健師ジャーナル編集部: 国際化時代の保健活動を考える在日外国人が日本の保健医療に期待すること, 62 (12), 1030-1033, 2006.
- 43) 長沼理恵, 城戸昭彦, 佐伯和子: 一地方都市で働く日系ブラジル人の食生活行動に関する記述的研究, 日本地域看護学会誌, 8 (2), 28-35, 2006.
- 44) 樋口まち子: 伝統的医療行動の医療人類学的研究-文化背景の異なるコミュニティの比較研究-, 国際保健医療, 21 (1), 33-41, 2006.
- 45) 大鶴次郎, 阿部智, 品田佳世子, 他1名: 港町歯科における在日外国人の歯科受療行動に関する実態調査, 口腔衛生学会雑誌, 53, 30-37, 2003.
- 46) 平野 (小原) 裕子: 九州における滞日外国人の生活と労働環境に関する調査報告書, Migrants' - ネット, 11, 2-6, 2000.
- 47) 大森絹子, 城戸照彦: 長野県における在日外国人の健康状態, 北陸公衆衛生雑誌, 26 (1), 15-18, 1999.
- 48) 平野裕子: 在日フィリピン人労働者の医療機関への受診に関連する要因, 「健康文化」研究助成論文集, 3, 139-148, 1997.
- 49) 西田恵子: 外国人に開かれた都市を目指して①外国人との共生を目指して, 横浜市調査季報, 126, 3-10, 1996.
- 50) 天明佳巨, 本田徹, 沢田貴志, 他1名: 外国人患者が受診したら座談会国際化の中で迫られる外国人医療, メディカル朝日, 1, 17-30, 1994.
- 51) 植村直子, マルティネス真喜子, 畑下博世: 在日ブラジル人妊産婦の日常生活と保健医療ニーズ妊婦健診・家庭訪問でのフィールドワークより, 日本公衆衛生雑誌, 59 (10), 762-770, 2012.
- 52) 川崎千恵, 麻原きよみ: 在日中国人女性の異文化における育児経験-困難と対処のプロセス-, 日本看護科学会誌, 32 (4), 52-62, 2012.
- 53) 周燕敬, 安達久美子: 在日中国人女性における婚

- 姻暴力の認知に関する研究, 日本保健科学学会誌, 15 (3), 132-140, 2012.
- 54) 歌川孝子, 丹野かほる: 在日外国人母子の子育て支援の現状と課題-市町村保健師を対象とした実態調査から-, ころと文化, 11 (1), 81-87, 2012.
- 55) 橋本秀実, 伊藤薫, 山路由実子, 他3名: 在日外国人女性の日本での妊娠・出産・育児の困難とそれを乗り越える方略, 国際保健医療, 26 (4), 281-293, 2011.
- 56) 高橋謙造, 重田政信, 中村安秀, 他6名: 臨床医からみた在日外国人に対する保健医療ニーズ-群馬県医師会、小児科医会における調査報告-, 国際保健医療, 25 (3), 181-191, 2010.
- 57) 歌川孝子, 阿部僚一, 丹野かほる: 在日外国人に対する母子保健サービスの提供状況と課題, 地域看護, 40, 50-52, 2009.
- 58) 鶴岡章子, 宮崎美砂子: 在日フィリピン女性の妊娠、出産および育児に伴うジレンマに関する研究枠組みの開発, 千葉看護学会会誌, 14 (2), 63-71, 2008.
- 59) 林田幸子, 片岡弥恵子: DVにより夫から離れることを決断した在日外国人妊婦の事例, 聖路加看護学会誌, 12 (2), 33-40, 2008.
- 60) 磯野富美子, 鈴木みゆき, 牛島廣治: 保育所に通う外国籍幼児における予防接種の状況とその養育者の予防接種及び育児に関する認識, 小児保健研究, 63 (5), 563-569, 2004.
- 61) 伊藤美保, 中村安秀, 小林敦子: 在日外国人の母子保健における通訳の役割, 小児保健研究, 63 (2), 249-255, 2004.
- 62) 江崎みゆき: 健康問題から見た在日外国人の支援母子保健事業に通訳を配置して, 地域保健, 34 (11), 16-25, 2003.
- 63) 山川茂子, 矢吹理香, 濱典子, 他1名: 健康問題から見た在日外国人の支援戸塚区における外国人母子への支援, 地域保健, 34 (11), 26-30, 2003.
- 64) 筒井百合子: 健康問題から見た在日外国人の支援母子保健・子育て支援事業スマイルプロジェクトを通して, 地域保健, 34 (11), 31-41, 2003.
- 65) 藤田紀見: 健康問題から見た在日外国人の支援活動から見えてくる外国人の医療支援問題, 地域保健, 34 (11), 42-51, 2003.
- 66) 渡邊洋子, 日暮真, 中村安秀, 他1名: 在日外国人が日本の母子保健・医療に望むもの, 母性衛生, 36 (2), 337-342, 1995.
- 67) 加藤恵美子: 在日外国人の保健医療問題在住外国人花嫁の健康問題に対する支援活動, 地域保健, 24 (10), 68-74, 1993.
- 68) 文鐘聲: 介護老人保健施設を利用する在日コリアン高齢者の健康状態, 太成学院大学紀要, 14 (1), 46-54, 2012.
- 69) 大塚公一郎, 辻恵介, 加藤敬: 在日日系ブラジル人とうつ病親和型性格, 日本社会精神医学会雑誌, 19, 7-15, 2010.
- 70) 鶴川晃, 野田文隆, 手塚千鶴子, 他2名: 日本に暮らす外国人のメンタルヘルス上の Help-seeking 行動の研究 (第2報) -ベトナム人のメンタルヘルスの概念と対処行動-, ころと文化, 9 (1), 56-68, 2010.
- 71) 野田文隆, 倉林るみい, 高橋智美, 他5名: 日本に暮らす外国人のメンタルヘルス上の Help-seeking 行動の研究 (第1報) -カンボジア人のメンタルヘルスの概念と対処行動-, ころと文化, 8 (2), 154-167, 2009.
- 72) 文鐘聲: 在日コリアン高齢者に対するソーシャルワーク, ソーシャルワーク研究, 35 (3), 33-40, 2009.
- 73) 文鐘聲, 三上洋: 地域在住日本人高齢者と在日コリアン高齢者の転倒要因の比較, 日本老年医学会雑誌, 46 (3), 232-238, 2009.
- 74) 文鐘聲, 三上洋: 在日コリアン高齢者・日本人高齢者の抑うつに関する比較研究, 太成学院大学紀要, 10, 113-120, 2008.
- 75) 道家木綿子, 辻恵介, 大山みち子: 在日クルド人難民申請者のメンタルヘルス-来日後の収容経験-, ころと文化, 6 (1), 51-60, 2007.
- 76) 本田暁, 大塚公一郎, 山家邦章, 他4名: 在日日系ブラジル人における移住後の経過と適応の関係における精神障害の文化社会的リスクファクター, 日本社会精神医学会雑誌, 14, 45-54, 2005.
- 77) 尾ノ井美由紀, 斯琴, 早川和生: 在日中国人の身体的・精神的健康度と生活習慣-H市における健康ニーズ実態調査から-, 日本地域看護学会誌, 5 (2), 70-78, 2003.
- 78) 深谷裕: 在留外国人の文化変容に伴うストレスと抑うつ-新来外国人を中心に-, 日本社会精神医学会雑誌, 11, 11-19, 2002.
- 79) Laurence, J. K., Harry, M (著) / 北中淳子 (訳): 文化精神医学の将来-国際的な視点から-, ころと文化, 1 (1), 39-54, 2002.
- 80) 大塚公一郎, 宮坂リンカーン, 辻恵介, 他5名: 在日日系ブラジル人の異文化適応とメンタルヘルス-アンケート調査による一般市民と外来受診者の比較から-, 日本社会精神医学会雑誌, 10, 149-158, 2001.
- 81) 平野裕子: 九州における在日外国人の精神的健康に関する研究, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 28,

- 129-137, 2001.
- 82) 辻恵介, 宮坂リンカーン, 大塚公一郎, 他 5 名: 日系ブラジル人の移住と抑うつに関する日伯比較研究, 日本社会精神医学雑誌, 9, 163-170, 2000.
- 83) 大塚公一郎, 宮坂リンカーン, 辻恵介, 他 5 名: 在日日系ブラジル人の精神保健調査文化受容の観点から, 自治医科大学紀要, 23, 171-179, 2000.
- 84) 平野 (小原) 裕子: 在日フィリピン人出稼ぎ労働者の精神不健康に関する研究, 九州大学医療技術短期大学部紀要, 26, 11-26, 1999.
- 85) 秋山剛: 国際化社会の精神保健 在日外国人の精神保健-主として欧米系-, 臨床精神医学, 28 (5), 507-514, 1999.
- 86) 大塚公一郎, 宮坂リンコン, 辻恵介, 他 2 名: 在日日系ブラジル人の精神医学的調査, 日本社会精神医学会雑誌, 7, 165-172, 1998.
- 87) 宮原香里: 【地域への愛着をはぐくむために-「知らないまち」に住む人への支援を中心に】 在日ブラジル人の子どもたちが地域で健康に暮らしていくための支援健康診断からみえてきた課題と展望, 保健師ジャーナル, 68 (9), 765-768, 2012.
- 88) 宮原香里, 近田玲子: 在日ブラジル人の母親の子どもへの性教育に関する悩み-小児健康評価相互作用モデルを基盤とした質的研究-, 佐久大学看護研究雑誌, 4 (1), 39-49, 2012.
- 89) 江志遠, 顧佩靈, 李欣曄, 他 2 名: 在日中国人就学生の異文化ストレスとソーシャルサポート源がメンタルヘルスに及ぼす影響, 心理臨床学研究, 29 (5), 563-573, 2011.
- 90) 佐藤由美, 齊藤智子, 山田淳子, 他 2 名: 在日ブラジル人学校に通う児童・生徒を対象にした健康診断の取り組み, 保健師ジャーナル, 66 (11), 996-1001, 2010.
- 91) 津久井智, 根岸好男, 佐藤由美, 他 3 名: 群馬県東部地域の在日外国人児童生徒の予防接種状況と保護者の意識, 日本公衆衛生雑誌, 56 (1), 35-42, 2009.
- 92) 馬斌: 在日中国人大学院生における精神的健康度とその心理・社会的要因, 順天堂医学雑誌, 53 (2), 200-210, 2007.
- 93) 川口陽子, 大原里子, 佐々木好幸, 他 2 名: 日本人・韓国人・在日韓国人小中学生の歯科保健状態に関する比較研究, 口腔衛生学会雑誌, 47, 675-682, 1997.
- 94) 平野裕子: 在日フィリピン人労働者の医療機関への受診に関わる社会人口学的要因, 日本公衆衛生雑誌, 47 (7), 602-609, 2000.
- 95) 小川俊夫, 白坂琢磨, 今村知明: AIDS/感染者新規報告比率-いわゆる「いきなり AIDS 率」-の検討, 日本エイズ学会誌, 14, 46-54, 2012.
- 96) 星野齊之, 大森正子, 岡田全司: 就業状況別の在留外国人結核の推移とその背景, 結核, 85 (9), 697-702, 2010.
- 97) 山村淳平, 沢田貴志: 超過滞在外国人における結核症例の検討-最近 3 年間の活動-, 結核, 77 (10), 671-677, 2002.
- 98) 山村淳平, 沢田貴志: 超過滞在外国人の HIV 感染者の実態と問題点, 日本エイズ学会誌, 4 (2), 53-61, 2002.
- 99) 宇野香津子, 内海眞, 沢田貴志, 他 2 名: 日本における, 在日外国人 HIV 感染者の医療状況と問題点, 日本エイズ学会誌, 3 (2), 72-81, 2001.
- 100) 山村淳平, 沢田貴志: 超過滞在外国人の結核症例検討, 結核, 75 (2), 79-88, 2000.
- 101) 金本由利恵, 松崎奈々子, 齊藤剛, 他 1 名: 在日外国人肺結核患者の外来治療および管理健診に関する調査, 公衆衛生, 60 (4), 298-300, 1996.
- 102) 松葉剛: 5 年以内に来日した非永住在日韓国人の結核に対する意識および健康行動に関する研究, 結核, 98 (6), 407-418, 1993.
- 103) 橋爪きょう子, 小島秀悟, 佐藤親次, 他 4 名: 在日外国人女性の精神鑑定例-異文化葛藤要因としての出産・育児-, 犯罪学雑誌, 69 (2), 36-43, 2003.

## Literature Review on Health Issues of Foreign Residents in Japan

Tomoyo NAKASHIMA, Syuichi OOKI

### Abstract

Literatures (19 books and 189 papers) were reviewed comprehensively to know the health issues, and factors that influence health issues, of the foreign residents in Japan. Books particularly reflected the real situation of foreign residents' life. However, the categories (factors that influence health issues) related to health and medical issues were similar to those of papers. Factors that influence the health issues of the foreign residents were mainly classified as "language barrier", "luck of communication with others" and "severe working conditions." Factors that influence the health issues of foreign residents would be different according to the nationality, resident status, types of employment, living conditions and so forth.

Keywords literature review, health issues, influencing factors, foreign residents, Japan